

第3回草津市協働のまちづくり・市民参加推進評価委員会議事概要

■日時：

令和3年3月15日（月）10時00分～11時20分

■場所：

草津市役所行政委員会室

■出席委員：

乾委員長、土山委員、重原委員、柴田委員、大脇委員、安原委員、福元委員

■欠席委員：

花澤委員、深尾委員、小辻委員

■事務局：

【行政】

まちづくり協働部 岡田副部長、まちづくり協働課 角課長、
まちづくり協働課 齊木係長、まちづくり協働課 大溝主任
健康福祉政策課 田村係長

■中間支援組織

【(社福)草津市社会福祉協議会】

高津氏

■協働コーディネーター

阿部氏、仲野氏

■傍聴者：

1名

1. 開会

2. 審議事項

(1) 第2次草津市協働のまちづくり推進計画の評価方法について

【事務局】

<資料に基づき説明>

【委員長】

意見等はございませんでしょうか。

【D委員】

記入例を見ると、各事業ごとに「予定」「実績」が箇条書きになっており、それぞれの項

目がどのように取り組まれたのかがこのシートでは確認できない。当初予算を積算した際の予定と、年度中にどのように実施したのかという決算額が数値的に確認できると良い。

【事務局】

現在は各施策の総額の予算額および決算額を記載させていただいておりますが、箇条書きになっている各事業の内訳がわかるように、各事業の予算額と決算額についてもそれぞれ表記するように修正します。

【A 委員】

全ての項目に事業の効果等の内容を入れると事業評価そのものになってしまう。この委員会が求められている評価の対象範囲を再確認する必要がある。

委員がそれぞれ関心のある事業を細かく確認していくと、事業の担当者にヒアリングしながら手法等について確認していかなければならない。当委員会で評価する対象の、深さや広さについて理解する必要がある。

【D 委員】

それぞれの課題に対して工夫した点の根拠となるものが詳細にわかるようになると良い。

全ての事業に対してそのような評価を行うと膨大なデータ量となるため、行政が注視している事業に関してコメント等のボリュームを増やすことが必要ではないか。

【B 委員】

細かいことまで分かれば良いが、専門的な知識などについて、当委員会に求められているものではないと感じている。

一つひとつの事業について評価していくにはあまりにも負担が大きいように感じる。

【委員長】

当委員会が全てを読み解く必要はないと感じている。

評価シートはこの委員会のために作成するのではなく、行政が事業の見直しにあたり作成するものである。

良い点、悪い点、良い点の傾向など具体的な話をすることで、評価していくべき。評価することの姿勢、考え方等をしっかり書き、共有することが大切である。

【F 委員】

「効果に対する評価」の数字が気になった。5段階での評価はそれぞれ共通認識の下で行うのか。どこかにそのような記述はあるのか。

【事務局】

段階毎に統一の基準を設けて、各実施項目で評価をしていただきます。

各担当によって、達成度の基準が統一されない可能性がございますので、同一基準のもと評価できるよう工夫していきます。

協働の評価というのはなかなか見えにくい問題があり、これまでは抽象的な評価しかできていませんでした。そこに切り込んで来年は見える化しながら評価をしていく、それを一番意識すべきは職員であり、当課がまとめたものを委員の皆様にお示しさせていただきます。

予算などの費用にこだわるのではなく、どのように取り組んできたかという、要点を入れていくよう検討します。

【A 委員】

このシート自身は職員が自発的に事業を実施していただくためのものであることには間違いはない。

それを超えてこの委員会は、草津市の中に市民協働がより展開していくということが、その上の目的としてある。

適切なデータを適切に整理することが重要であると改めて感じた。事業のデータベースがしっかりしていて、クリックすればバックデータが出てくるような仕組み、IT化の前提を支える基礎的なデータベースが整っていれば評価しやすい。

評価の段階について、5段階にすれば必ず真ん中に寄るため、4段階で評価することをおすすめする。

【委員長】

各部署に事前に、「問い合わせがある可能性があります。」と伝えておくべき。

A 委員が発言されたように、データベースをきちんと整えていくことは非常に重要である。マイナス評価ではなく、“ここまでできた”というプラスの評価をしていただきたい。

依頼文での伝え方が大事である。「この評価はこういう目的でこのように進めます」と、各部署が協働のまちづくりの中で、どれだけのものを達成したのかということを知りたい。

不十分などところがあるならば、その理由をできるだけ具体的に聞きたい。そのようなことを依頼文で伝えていただきたい。

【E 委員】

評価のスケジュールはどのように考えているのか。

【事務局】

今回の委員会で評価シートを確定させていただき、年度末から来年度の頭にかけて照会させていただいて、各担当課に回答いただきます。

6月、7月に第1回目の委員会を予定しており、各課から回答いただいてまとめたものを、提示させていただきます。

【F 委員】

資料1のシートと評価シートは同時に照会を行うのか。

【事務局】

評価シートに関しましては、協働の相手方にも評価をしていただくことが必要になりますので、令和2年度の評価は難しいと考えていますので、来年度事業から評価を行いたいと考えています。評価シートについては、令和4年度の委員会で、提示させていただきたいと考えています。

【B 委員】

評価シートについて、公開予定となっているが、行政と団体がどのように評価したかが公開されるのか。

行政と団体の評価が異なる項目について、なぜそうなったのかという、突き合わせが大事である。

【事務局】

評価シートの公開については、事業の担当課とまちづくり協働課で各事業のバックデータとして、このシートを保管したいと考えており、公開はしない方向で検討しているところです。

団体と行政の評価が異なる場合は、話せる場をつくることで次年度からの事業に繋がるよう、目標の共有等を改めて実施していきたいと考えています。

【A 委員】

評価ってどうしても身構えられてしまうので、この委員会でアワードを出すということはいかがでしょうか。それを選考するという形で評価することで、前向きな取組をすることも是非検討いただきたい。

【D 委員】

評価の項目が空白になっているものがあるが、結果的に実施しなかった事業についても、プロセスとして取り組んだ事、努力したことがあれば記載すべき。そのことも各部署で統一の基準で記載する必要がある。

【事務局】

現在記入例の新規事業に関して、工夫した点等、空白になっている部分がありますが、

前年度にどういう取り組みをしてきたかということをも前向きに評価ができるように、実際にこの評価内容を入れていくときには工夫していきます。

コロナや地震等、想定外のことがあった際に、どのように評価するのか、評価項目に入れていくのか、それとも特記事項として記載していくのかということについては再度検討します。

【委員長】

行政と団体が互いに評価を突き合わせるということが重要である。“〇点以上点数差があった際には、必ず話し合いを行う”等ルール化することも必要である。

【C 委員】

昨年1年間、今年の前半、ほとんどまちづくり協議会の行事ができてない。

来年度から事業が実施できる状態になれば、再開するために動き出すのが大変であると感じる。それに携わっている役員の精神的ストレスをケアできるような取組をしていただきたい。何か検討されていることはあるか。

【事務局】

コロナの関係で今年度ほとんど地域の事業、経済が停滞した中で、まちづくり協議会についても、国・県の動向を踏まえて、市から通知を出させていただきました。

一旦事業を止めると次年度に再開しようとするパワーが承継されないということが懸念されます。

今後地域の皆さんが混乱しないように向き合っていこうと考えています。地域の支援という形で各学区を回る職員もおりますので、柔軟に対応していきます。

【委員長】

まちづくり協議会の支援はどここの役割になってるのか。

【事務局】

まちづくり協働課が、財政支援や人的支援を行っています。

【委員長】

コミュニティ事業団は直接関わってないのか。

【事務局】

コミュニティ事業団は地域のコンサルタントのような役割を持っていますので、事業団にも会計サポートや事務のサポートを行っています。

【委員長】

まちづくり協働課とコミュニティ事業団の関係、コミュニティ事業団がどのような事業を実施しているかということはどこで評価されていくのか。

本来まちづくり協働課がコントロールしているとするコミュニティ事業団の事業や課題等について、一本化されてまちづくり協働課の方で把握できてないと、各協議会にとっては不安で仕方ない。

【事務局】

市の具体的施策のところには中間支援組織の活用という項目がございますので、市が中間支援組織と連携しながら、市民活動やまちづくり協議会の活動を活性化させるという評価と併せて、中間支援組織の具体的施策についても計画に掲載していますので、そちらについても、市と同様に、資料1の評価シートを作成していただきます。

【委員長】

各まちづくり協議会の具体的な活動を把握するのはどこの役割になるのか。

【事務局】

まちづくり協働課です。

【委員長】

コミュニティ事業団とまちづくり協働課で連携は十分に取れていて、評価表には連携が取れた上での成果が書き込まれるという、という理解で良いか。

【事務局】

実際コミュニティ事業団が、現状としてまちづくり協議会と市との中でどのような役割を果たしているかということが重要であると考えています。

まちづくり協議会はまちづくりセンターの指定管理を受けておりますので、指定管理に関わっての会計事務や総務サポートを全学区一括で行っています。

また、各学区ごとに策定している計画の策定にあたって、コミュニティ事業団が要請のあった学区に対してサポートをしています。

運営に関しての相談については、まちづくり協働課が中心に行っているのが現状ですので、その点を踏まえて評価していきたいと考えています。

【委員長】

まちづくり協議会が悩みを持ったら、まちづくり協働課に相談し、まちづくり協働課が該当地域に入り込んでいくという仕組みになっているのか。

【事務局】

課題事項の度合いや内容によります。

【委員長】

草津市の姿勢になるが、地域コミュニティーを動かしていこうと思うと、その地域のことをよく知っている第三者の専門家が寄り添うことがとても大切である。そういう人・機関はどこに存在しているのか。

【事務局】

コミュニティ事業団は限られた人材の中で、なかなかその域に達していない現状があります。市で地域支援員を配置しておりますので、学区毎の困りごとについて相談を受け付けているということが現状です。

【委員長】

まちづくり協働課とコミュニティ事業団、社会福祉協議会が有効に連携しながら動いたら、地域の福祉の問題と、その他の問題をカバーしていけるのではないかと感じる。

協働のまちづくりを推進するために、まちづくり協働課がコントロールし、全体を動かしていく仕組みがあるのかが気になる。

【事務局】

本来目指すべきところがあって、どこまでできたかという観点で次年度以降評価を行っていきます。

【委員長】

少なくともまちづくり協働課の評価の中には、コミュニティ事業団と社会福祉協議会の事業や課題、次年度の取組についての話が出てくることを期待している。

評価の内容については問題ない。

他にないようですので、以上を持ちまして、本日の審議事項を終了します。事務局に進行をお返しします。

【事務局】

それでは、これを持ちまして、第3回草津市協働のまちづくり・市民参加推進評価委員会を閉会させていただきます。

3. 閉会
